

# 天正遣欧使節団とキリシタン弾圧の悲劇

2017年4月

我部山 民樹

2020年10月改訂（画像追加他）

以前より殉教事件や島原の乱の背景を知りたいと思っていたが、英雄たちの選択(NHK)「悲劇のキリシタン弾圧～大人になった天正遣欧使節の決断～」を視聴して、もう少し調べてみることにした。

## 1 殉教事件の概要

### (1) 当時の教会の事情

プロテスタント（イギリスやオランダ）の出現で、16世紀のヨーロッパではカトリックの信者が減少して、ローマ教皇は困っていた。スペインのカトリックの一派のイエズス会は新たに信者を獲得すべく、東南アジアに宣教師を派遣した。1549年に日本に伝来した。

当時の日本は戦乱の世の中で、民衆は現世に絶望していた。キリスト教の来世は救われるという教えが民衆の心をとらえ、急激に信者が増えていった。また、大名たちは南蛮貿易と文化（科学技術、兵器等）の導入を目的にし、積極的に改宗していった。1570年には信者は15万人に達していたと言われている。こうした背景で、急激に信者が増えていった。

宣教師はローマ教皇に日本での布教活動の成功を信じてもらうために、13歳前後の4人の少年をローマに派遣した。「天正遣欧少年使節」と言う。

天正遣欧少年使節（てんしょうけんおうしょうねんしせつ）は、1582年（天正10年）に九州のキリシタン大名、大友義鎮（宗麟）・大村純忠・馬晴信の名代としてローマへ派遣された4名の少年を中心とした使節団。イエズス会員アレッサンドロ・ヴァリニャーノが発案。

教会はヨーロッパで減少した信者数を日本で補うことを期して‘東方の三博士’に因んで、3人の使節（1人は病気ということにされて教皇に謁見させてもらえなかった。）を熱烈に歓迎した。4人は教義を学んだ後、1590年に帰国したが、少年使節の帰国前の1587年に秀吉が「バテレン追放令」を出している、布教が禁止されていました。彼らの出発時とは環境が激変していた。

### (2) 秀吉による「バテレン追放令」

長崎がイエズス会の領地になっていることを秀吉が知って‘日本を征服しようとしている邪教’と断じたことにより布教を禁止する「バテレン追放令」が発せられた。宣教師の布教の禁止、大名の信仰が禁止されたが民衆の信仰は許

可されていた。

実際、スペインはフィリピンに進出して、土地を占有していた（植民地化）。宣教師の布教活動に続いて国家が進出して相手国を征服していた。一方、イギリスやオランダは宗教を持ち込まず、貿易のみを望んだ。彼らはライバルのスペインのやり方に関する情報を積極的に流していた。

・宣教師の指示でキリシタン信者が異教徒の寺社を襲って仏像を奪い、唾をかけ、薪にした。このことで日本人や異教徒を見下していると判断された。本当に見下していた宣教師もいたらしい。驕りだろう。後に帰国した4人の使節のうちの1人がそのことを理由に棄教した。

・ポルトガルが東南アジアで日本人を奴隷として人身売買していた。等？

### (3) フェリペ号事

スペインが1596年に土佐沖に漂着し、乗組員の中の「スペインは相手国を布教で教化し、後に軍隊を派遣して植民地化する。」との発言が問題視された。

1596年(慶長元)スペイン船サン・フェリペ号が土佐国に漂着した事件。同船は同年7月フィリピンのルソンからノヒスパン(メキシコ)へ向かったが、途中、暴風雨のため長宗我部(ちょうそかべ)氏領の土佐国浦戸に入港。事件は豊臣秀吉に報じられ、同船の積荷と乗組員の財産はすべて没収。乗組員のなかに、スペイン人はまずキリスト教の布教によって住民を教化し、のちに軍隊を派遣してその土地を植民地化すると吹聴した者がいたという。このため秀吉は疑念をいだき、二十六聖人の殉教の発端となった。同船は翌年マニラに戻り、没収品返還・殉教宣教師遺物引渡し交渉を行った。(山川日本史小辞典(改訂新版), 2016年, 山川出版社)

### (4) 秀吉によるキリスト教禁教令

秀吉が乗組員の中の「植民地化」するとの報告を受けて疑念をいだき、1596年に発令した。布教活動禁止および大名に限らず民衆の信仰も禁止された。

### (5) 殉教事件

スペイン船サン・フェリペ号の土佐漂着が引き金とな<sup>とさ</sup>って、フランシスコ会の宣教師らの無許可の布教活動が、当時の為政者である豊臣秀吉<sup>とよとみひでよし</sup>の耳に入った。秀吉は直ちに見せしめのため、フランシスコ会宣教師や信徒ら24人を京都で捕らえた。キリスト教信仰を理由にした日本最初の処刑だった。キリシタンの町長崎で処刑を行うことになり、24人は約1カ月にわたって約1,000kmの道のりを歩いた。道中、2人が尊い犠牲になることを望み、これに加わった。

プロテスタントに押され、カトリックの信者が減少していた時代である。スペインのカトリック教会は対策として海外での布教活動を奨励した。当時、信者が増えていたのは日本だけだったようで、日本が布教のターゲットとなった。

禁教令を発令した後も積極的に布教活動を続ける宣教師と信者たちを秀吉が挑戦的と考え、見せしめのために処刑した。

キリスト教では殉教は最高の榮譽であり信仰の最高の証であるので迫害を甘んじて受けた。結果、1597年に26人の殉教（処刑）という悲劇になってしまった。現世に絶望した民衆は殉教の榮譽だけでなく、来世の救いを求めて絶望的だった現世に生きるより、むしろ死を選んだのかもしれない。



ローマでは儒教者（犠牲者）26人は聖人として崇められた。悲劇の後教会は日本での布教活動に熱を入れ、宣教師は日本を目指して来た。

家康は当初、キリスト教を禁止しなかったため、1600年頃には信者は30万人に達していたと言われている。

## 2. 島原の乱の概要

### (1) 家康による「慶長の禁教令」

1614年に「慶長の禁教令」が発せられた。「大坂の陣」（徳川幕府と豊臣秀頼側の大坂方との戦いで1614年の冬の陣と1615年の夏の陣がある）で多くのキリシタン大名が大坂方についていた。また大坂城内に宣教師たちがいた。彼らと30万人の信者が連合した場合の一大勢力を幕府が恐れたことが背景にあるのだろう。また、ジャカルタに進出していたスペインとの連携も恐れたのかもしれない。（宣教師たちが大坂城にいた理由はわからない。）

同じ年に禁教令により宣教師および代表的なキリシタン大名の高山右近等はマカオに追放された。

### (2) 悲劇的な島原の乱は何故起こったのか？

禁教令による教徒の弾圧強化があるが、それ以外に

- ① 大凶作
- ② 島原城主「松倉重政」の重い年貢、年貢を納められない人への残虐な行為に対する反発（一揆）

### ③ 宗教心に基づく殉教への榮譽心

#### (3) 島原の乱の悲劇的な結末

一揆軍が籠城した原城は海に面している。一揆軍の総大将とされる天草四郎はポルトガルの援軍が海側から来てくれると言いつけた。実際、要請はしたのだろうか？要請をして受け入れられなかったのを承知した上で援軍が来ると言いつけたのだろうか？

幕府軍の総大将「松平伊豆守」（知恵伊豆と言われた）はこの情報を捕虜より入手し、援軍と見せかけてポルトガルの国旗を掲げたオランダ船を使って城に乗り込み、幕府軍は壊滅に成功した。一揆軍は幕府軍を援軍と思い、積極的に城に引き入れた結果、数万の籠城者が皆殺しになってしまった。

このような惨劇になったのは民衆がポルトガルの援軍を信じて頑張り続けたことも一つの要因だろう。



一揆軍が籠城した原城址



### 3. 天草四郎とは

「神の子」として崇められ、わずか16歳で日本史上最大の一揆と呼ばれる「島原の乱」を総大将として戦った天草四郎。派手なひだ衿に黒いマント、どこか異国情緒のある神秘的な佇まいとカリスマ性は人々の想像力を刺激し、「海の上を歩いた」、「盲目の少女の視力を回復させた」といった数々の奇跡のエピソードとともに、「実は天草四郎は織田信長の孫だった!？」という驚愕の噂も生んだ。

天草四郎は、1621年(元和7年)頃、関ヶ原の戦いで斬首されたキリシタン大名、小西行長に仕えた益田甚兵衛の子として生まれ、本名を天草四郎時貞という。

神の子、四郎の出現はその25年も前の1613年(慶長18年)、マルコス宣教師によって予言されていた。キリシタン弾圧によって島原を追放されることになったマルコス宣教師は、「25年後に神の子が出現して人々を救うだろう」と予言して日本を去って行ったのだ。



天草四郎

それからまさに25年後の1637年(寛永14年)、少年になった四朗は、冒頭で紹介したようなキリストさながらの奇跡を次々と起こしていった。

キリシタン弾圧のみならず、飢饉や重税に苦しめられていた農民は、救世主の出現に歓喜。神の子のもとに結集していった。

神の子、天草四郎はポルトガルに援軍を求めただろうが、本当に援軍が来ると信じていたのだろうか？民衆を操るための詐術だったのか？予言者でもあり、手品師でもあったという話も残っている。

## 5. 最後に

禁教令の結果、島原の乱で皆殺しという惨い結末を迎えてしまった。宗教は民衆を精神的に救うだけではなく、生命を守ることが目的であろう。踏み絵を踏まずに生命を失くしてしまった宣教師や信者達の悲劇はとても悲しくて残念な出来事である。

神が転びバテレンと言われた宣教師をも許されたとする遠藤周作の小説「沈黙」がある。主人公の宣教師は長く苦しんでいて ‘自らの棄教という犠牲によってイエスの教えに従い苦しむ人々を救うべきではないか’ と神に問うたが、神は沈黙されていた。ついに「踏み絵」を踏むときになって絵の中のイエスが「踏むがいい。お前の足の痛さは自分が一番知っている。私はお前たちに踏まれるためにこの世に生まれた。お前たちの痛さを分かつために十字架を背負ったのだ。」また「私は沈黙していたのではない。お前たちと共に苦しんでいたのだ。」と。

**ジュゼッペ・キアラ (Giuseppe Chiara、慶長7年(1602年) - 貞享2年7月25日(1685年8月24日))** は、イタリア出身のカトリックイエズス会宣教師。キリシタン禁教令下の日本に潜入したが捕らえられ、迫害と拷問の責め苦に耐えかねて強制改宗により棄教し、**岡本三右衛門 (おかもとさんえもん)** という日本名を名乗って生きた。遠藤周作の小説『沈黙』(篠田正浩により1971年に、2016年にマーティン・スコセッシにより『沈黙-サイレンス-』として映画化)の**主人公のモデル**となったことでも知られる。

大凶作そして城主の収奪や弾圧に対する現世の絶望感に起因した単なる一揆ではなく、キリスト教独特の殉教に対する榮譽心が重なり、この惨たらしい悲劇に繋ってしまったのだろう。

以上